

漫

稿

創刊号

1957.3

幸福とは、山から道を上りきしまつて、谷を下りてゆく時
の気持であろう。何かひとつ、ほんとうの仕事
を、し終えたといふ事が、心を軽くするのだろう
友達と登った山の話などしながら、谷を下りてゆく
気持は、頗らかに樂しい。

渕松佐美太郎

「たつた一人の山」

山岳会結成に当つて

辻 勝四郎

一九五六年十二月八日、我が学校山岳会は正式に発足する事となつた。こゝに山岳会結成に当り一方を足す事と云つた。山縣先生以下多くの先輩、後輩の諸君に深く感謝する次第である。

そもそも山岳会結成については、二年前より二、三ヶ月の口にするところではあるが、その機運さへ、具体的な進歩もなく持越しられて未だ今日あつたが、去年の夏頃より、此の話が大方の賛意となつて現われ、山縣先生、吉田君等の音頭の内に先づ十月发起人会が田原氏以下六人によつて開かれ、次いで十一月十日豊田氏以下各期モヤブテン、山縣、市川兩先生、その他幹部の十数人が母校に会し具体的な議事の決定が計られたのであつた。

この会議で唯一の遺憾全事は、人格高尚にして、博学多才の人格山行経験豊富たるべき会長に不肖小生を送出した事であつて、それは後々まで我会に禍を残す事となるであらう。

吾に起せば、久の懐い、上木崎、飯野合時代に部隊長(豊田氏)、田原氏を中心とする他に柳井とうなみ、高橋中巴、山縣先生を部長ト擔て上木崎、母校、山岳部を創設して以来、早くも今春は第7期の山岳部卒業生を夏るに至つたのであるが、その間にあって、山岳部員の葉陶よろしきを得て多くの錚々たる山界が輩出した事は、慶賀にたまない次第である。

そして又、夜中に平員室で机や椅子を燃やし、火煙頭を立ちつけていた才一朗連中の教諭たち、田原氏や豊田氏、或は大武氏等が、今や謹直として和田舎教師よろしく教壇に立つ姿を夏る時、私は、かいわとして翌日日曜日をきんじ得をいつ下ろす眼の間があれば、山縣リード、したがて雨中、我を立ちかし今コースに導いて、遂には終日飯山夜と徹して雪積五十軒に満たず、朝六時半に入込ヶ、その山頂でのんびりと昼寝をして、いた姿や、Y君の大昔薩摩傷事件、或は谷川岳

とせつとしてやがて飲食と食つて、山に登る。

山路に踏み、ふと見つけた谷に傾いた炭塔小屋で
そろ低温で合の方に頭を並べて一夜を明かし、翌

日痛くなつた頭を下、まんざら山を下つた等、芳
き日へ出来事が昨日の様に克明に思ひ出されて来
る。うつてそんな連中が相も要らず、或る者はガイルを
音に、又或る者は馬鹿をかいキスキンを背負つて

山ト彷徨する姿を見る時、
「奴さん、仲々やるではな、が」と思わず相好つく
られるのを見えりうである。

さてこちむ寒い走も新たに、新旧相睦つく、山に登り
夫ト山を語らへ、もつてより良き我等の山岳会に育
て上りようでは全いか。

最後に餘事ではあるが、総会の事務所に於
ける懇宴に於て、如何に醉つたるとは言え、一時
同遊く長きにわたり高架ク中で、ひまきをかゝて
寝込んで居た、丁君の醜(臭)態は、いささか頂け
なかつた。山男たるもの、そんな事では駄目であ
る。

月 日 会長のこと 吉田添六

アルコールがあれば食事の量など少くつたって、
ハハんだそうだ。妙に味の悪く好き、どの食
物にもさりさらとかかけ。それを又ものすこ
くうまそうにはくつく。

明日は翌日となると日當がいい。頃

え、ミ、ミ、ミから家に居る時、近づくと、
この山つけて何の意味だ。リックも、ロード
かの小屋がしづつといろ、帽子が飛んで、もカケ安
つても、のリックだけは同じだ。これをくちくうと
しめ、ひよいと背に乘せスタコラ歩き始める。
そつすると強の強の強の強。それはジョンアーノードや
黒天に被覆している男性的なマイトが彼の、に
宿つていろからだ。從つて今では一の倉の壁が一番衆
いらしい。あゝ金子、こう登り、と見る地図は、
いつもこの一が倉だ。その彼が最近、尾根木ノ木は、
疲れて、け全い、と云、始めた、その癖、南アリ金山、
縱走と今夏の計画と一緒にわけだ。

歩びて疲れて、その深ぶ穀われぬ女の山顶の喜び
を彼は人倍知つて、ひらうだ、カヌー、モードル、

私の推奨するルート

(谷川岳の巻)

(一) ザンケ沢

服部 公一郎

ザンケ沢は丹沢の水無や勘七の沢、或いは興多
や族父の沢歩き慣れた人々、谷川岳の沢
志す時、ヒツコ一沢などと共に最初に登る
良、沢であろう。

此の沢は、谷川岳の一般ルートたる西黒沢か、レバ
の左に、サンザカ方向に急峻にびていろ沢であ
る。明る、快適な渓行の樂めルートであ
る。此の沢と言つては、あくまでも川床が傾斜してい
るスラブ状の滑澗で、ルートは殆んど水の流れる
ゴツゴツした木立を抜けて出まつて、
沢口合ひ處に木立を張つて登る時とか、たゞ
沢大いに目眩に登る場合は、頂上を極める必要
ある。から右に草付きの中ノトトモ、左に壁く岩の露
出、右とミウを抜んで西黒尾根と出れば六時、左
へと大、滝は手二三の標の階段状を登らば、そこ上
部は原道となく、やがてサンザカ附近に西黒尾根
へとある。半日コースとして、谷川岳の沢の初心者

が、ルートの研究度しない分、のんびりと滞れる
樂しいルートである。

(二) 残雪期の倉の沢

吉田泰彦

案内書べ「残雪期の谷川岳は良さを存分に満
感、不思議最大ルート」と云つて、も如く、このルー
トはヒツコ一とアイゼンの便、始めの人には、樂
しむ殘雪期の倉の沢である。

此の沢は、谷川岳のシカモ尾根(シカモ尾根)は、ヒツコ一沢やマキガ沢をこなせる
人にほ、樂に歩けるコースである。しかし時期により
て、雪庇を状態が悪く、非常的な悪場と化す事
がある。どうだか、此に入口は、五月上旬以後が
良、だろう。たゞし去年の五月二十日に入った時
は、この沢に二ヶ所、クレベイが出来ていた。
此のルートに入ると、五本一杯は一ヶ所、
もう相当下のところまで雪庇だらけで、水
あらずから朝食は、西黒沢かマテが沢土合の一分
りだ。

この次につづいては格別の注意も、が、沢の行程で、正面から
入って来る枝沢に入らぬことを、丁度此のクレベイをす
急に下り、へたにスリップすれば下の岩まで飛れうる心

バ有るから、サイルでアンカイレンする位の慎重さが欲しい。

此のコースで何と云つても快適なのは、コルから沖の耳までカシセン尾根のルートであつて、右に一の倉の岩壁を左にマチガ沢左眺めながらのプロムナードは、底抜けに樂しい特にこれから一の倉に入ろうと思う人には、一度は歩いてもらいたいルートで此の尾根からの眺望は、奥壁などのルートの探索に良い。

なを、雪の消えた一の倉は一の倉でも届きの悪場である事をお忘れなく。

(三) ザツテル越え(Bルンゼ)

辻勝四郎

中間クリッジスはBルンゼ左手の草付きにルートをとれば良いだらう。

一つ倉沢にけ二千に余る難易格々ルートがあり、それらは初級、中級、上級の三つに大別出来るが、それらの初級と言われるルートの中でも最も容易と思われる、言ふ換されば、始めて一の倉入りする人が登るによる、と思われるルートが、このザツテル越えであらう。も

のものである。

とも、いくら容易と言つても、その中級と言われる諸ルートが、岩場の少ない我國に於ては有数のバリエーションで、山石場の少ない我國に於てでは、特に一の倉では、午前中に積雪へ出る」と云う事が鉄則となつてゐるが、もし、全く天候の激変に合つた場合には、ニルンゼのザツテルク少し下のところと、マツカーホーン状岩峰のBルンゼのところと、二所の坂治本東の岩小舎があり、理にそいで一歩によつては相当困難を個所とも共喰わすから、

出来水はハーケン技術など十分に積んでから入つてもらいたいものである。

ニルンゼ、Bルンゼを通じて滝は大体五米から十米、ピツチが短かいので高度感はないが、そりづれもが、ヒツゴ一沢やマチガ沢の滝場より相当轟く。特に慎重を期したのは、ニルンゼに取付けてすぐ現われる三ヶ滝と広河原からBルンゼに入るまでのアルニゼに掛つて、いる二ヶ所程の滝場であらう。ルートは殆んど滝の右手に求められる。

手を滝沢上部に出てから雨にでもたゝかれたら、B.C.をとれば良いだらう。

此のルートは岩場の容易さと共に、登攀の途中で四ルンゼや五ルンゼ、六ルンゼ、或は南稜等が一望のものとなり、次に登るベミルートの探索によつて、これらの岩場を写真にでも収めて、机上で案書きと照合して、ルートの研究をするのも又案るものである。

なを天気の変りやす、浴川岳では、特に一の倉では、午前に積雪へ出る」と云う事が鉄則となつてゐるが、もし、全く天候の激変に合つた場合には、ニルンゼのザツテルク少し下のところと、マツカーホーン状岩峰のBルンゼのところと、二所の坂治本東の岩小舎があり、理にそいで一歩によつては相当困難を個所とも共喰わすから、明かれた記録があるから心得ておくと良いだらう。

初冬の金峯山

山縣昌彦

昨年（三十二年）十二月一日の夜、二つ年の山旅の歸路として一人リック五背に金峯登山に出発した。シースンオフの嵐、夏季に見られる新宿駅の方の雑踏もなく、発車三十分前ぐらに列車に乗り込んでも座席に坐れるのは有難い。二十三時五十五分新宿駅発車、登山看らで恰好を一人人達が一輛に十人位づけ居るよつて大體は軽装備で乾糧、甘利、夜火、火薬は入笠山ぐわいの所らしい。夏のあの緑樹一杯の木々、四等寝台も満員と云ふじんとして活氣にあふれた車内と異なり、十二月入った今日ナ夜行は、何處ともくひつそりと自分の様な一人旅にはかしい気分を漂わせて、いる。

一眠入りするごとになく近崎に着く、四時を分。

宿泊料は往復、東洋券以前に二十名程の登山

者が降り立つた。然し大部分はサトウ山へいり、その足音が聞こえくみつてうとうとして、残つたのは自分と、あと四人、ハーディだけとなつた。増留へ行くバスは七時十分に出ると調べて来たので、それを待合室で一眠りすうつしりでショットを待つて来る。念のため駄菓子に貰つてあるバスの時刻表を憶り、電灯を照して見ると何と十二月一日より時刻改正である。翌日は八時五分となる。これでは全峯山上で往復一回の間に帰る計画、少し書き付いたがと古川さんをして、さつきバーテーク連中、もう一人ペーライは今日は端橋を行つて金山で一泊、峯をやる予定と後で知つた。——バスを行つたらしく、タクシードライバーで行く相談を始め、ゆきはかるが、丁度ついでだからと同乗させてもらつ事にした。（父が死んだのに書かれてゐる、タクシードライバーは改めて一五〇円であった）

三十五分 増富ラシウム鉱 泉に着く。まわいな旅館へ
クナイ荔枝、小さな温泉町の感ぜである。立ち寄り歩

き始める。道はトランクを運ぶる立派を道、夜明

ケに近い前鳥か、灯火をして歩ける。本谷川を何

回も橋を渡り、右岸を或は左岸を辿るうちに

次第に夜が明けて来た。どうも道が白いと思つたら

霜ではなくて薄く残った雪であつた。そして本谷川も

西岸、或は流れがら露出した岩うまやには一層

の氷が張り、この川に流れ込む小谷全沢は、夏草

をつらうを垂れて凍結している。こゝへ来て気温

は零下五度を上るまい。向も全く木賊峠への分歧

奥である落合から左に折れ金山に着く。時計は六

時四十五分を指している。一説に車を降りた四人、ペ

トライは大部屋へ入れたりし。

朝々三山の草原に立つた時、何も云ひぬ憂懼に

伏して、人には、ないだろう。

さへに十時七分、金峯山ノ東に鉄山から遠く国師岳へ

二千五百六十段の尾根の連り、略々、北に瑞牆

山にて、行異全岩峰を朝日に輝やかせてのぞむ

金山は一面の牧歌的草原、その一隅

の草、崖根から朝靄の什麼か、白い煙がたなび

暫し、この静寂を美すに覺とれ、後、金山小屋
へ入て、炉端じき食ふと、してもらつた。食事

せて小屋の主人に山の様子を聞いて、さくに例
四人、パーティが着いた。こゝへ荷物を運びて休んで
から瑞牆へ行つて来るとの事。

七時十分 金山小屋を出発、金山峠から稚不林の中の

落葉を踏んで、里宮坂を急登すれば、富士見平

へ出る。八時。分。富士が五合目ぐらへまで雪に覆は

れだ姿をくつきと直へ青空に浮かせられて、人

氣は全くなく、たゞ落葉がナーゲルの下に散る

云うだけである。こゝから道は次第に細くなり

残雪がかなり現われ出した。左手ド樹回を廻して

瑞牆が、印象的な姿を呈させてくる。飯盛山、

腰を絞り、八時五十分に大日小屋に着く。こゝへ

は一面の雪で、雪ヲド埋まつた沢の畔に小屋の方

へ、小屋の窓は打ち抜かれて、中からも見る

ふさいである。入口の戸や床も大体完全で、これ

らシユーラーフでもあれば、冬期でも使用出来よう

床の上にリックが二つ置かれてある。昨夜此處に泊つ

今朝金峯ド登つたらし、どうせこゝに泊ろと

度ら下に水晶峠から屏仙峠へ抜けければ、表の

と想つたが、まあ他人の事は、自力も弁当等

量り物だけ残し、他は此處に置きて小屋を出

て、入って炉端じき食ふと、してもらつた。食事

小屋の前一面の雪と倒木下道は急に消えていり

踏跡を辿って十分程登つたが、余りにも木立の中
で小まく曲折するのでおかしいと思つてゐるうちに、
木立穴はと踏跡は消えていた。そつともういく
か月程をつけて登つて来たので、同道之下に小屋
まで引寄せたりは有難かった。

こうう時が、一人旅で一番心細い場合の一である。

煙草を一段ト々ながら雪の中
でゆうイルートを探す。昨
年クリ、南アルプス山やド二
人で雪の中には埋まらない

ルートで探したうえ更に走す。

やつと雪に埋つた次第越えて

向う峯に繞つて、

跡跡を發見して、

行つとして登り始め

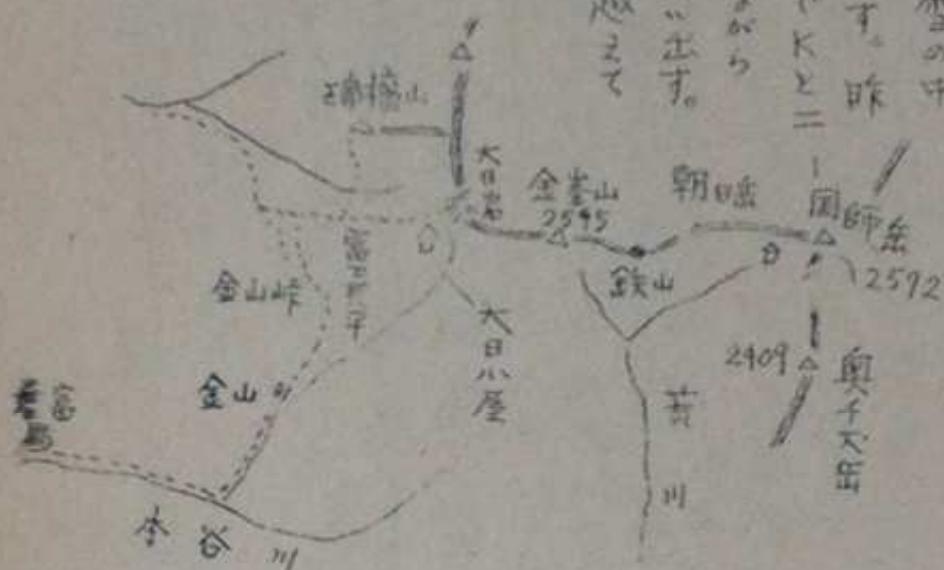
る。而して行つては迷う

事もなく、大日岩の

下より雪と偃松の

間の谷を辿つて五大

石ト一鞍線・とふ出



寒気が身ドーミる。軍手の手袋は革
けた岩に触ると、ひつたりくつき、はぐすとペイ
ペイと音がする程である。

然し奥千丈岳には雲一つなく、大日岩馬たきから

八ヶ岳はその裾野迄全容を現わし、その後方に

は北アルプスの白い連山、左半には南アルプスの白い連山、その前に鳳凰三山、左は甘利山にて、東に甲斐駒、真白な仙丈、綾子北岳から裏鳥へ、連山、その前に鳳凰三山、左は甘利山にて、東に綾子中天アルプス東に左は御坂山塊と前半にて富士の糸引峠と、手にとるよつにくつきと叫められる。

五丈石のやきで大日小屋へ荷を運びて束だらし、二人かペーテイに食付く。東に東進し、三箇所矣に達する。二五九五メートル高處では奥千丈北峠にてを譲るが、奥秩父の三峠として八ヶ岳或いは南アルプスにセラミット型の雄姿を望んで、今迄登機会のなかつた金峠山頂に立つた方だ。時に十時四十分。
しかし烈しい風に吹きさらしにされるのに閉口して休む間もなく五丈石下まで引返し、ここでまた居天門の二人連れと同様、岩の間に風をうつて、

太平に夏える瑞牆は此夕から見ると余りにも低く、小さき山で、帰りに登つて見るつもノであつたが興味が半減してしまつた。

（は）通^{ハシマ}て居ても、せほり固^{クモリ}から吹^キつけ、そのう方に体^{からだ}がタタタと震^{ふる}えて来る仕事^{ハサウエイ}。食事も

金山の草原は午後の中射しも浴びて一面
草は目まばゆい程に白い。時向ふ早うで
に寝転んで、金峯連山と瑞牆を眺望す
みながら一人静けさを味う。

早々に引上げる事にする。食事も同様で、また手袋は日向に出しておいたのだが、コチ／＼に立っており、雨がこれを打いた時は指の感覚が全く立たなくなってしまった。替手袋を小屋に置いて来た事を後悔した。下り下り二十分ぐらゝ荷物をこし／＼こすり、或は打たれて、やつと、痛みを感じ本と、十分位まで出来戻しに灰った。次第に体力が下つて気温が上ったため簡単に止った。まづう。積縛で傘をすくあつた／＼素に一しきで、今は少し不注意であった林だ。

八日小舟に乘り、荷物をまとめて下る。間もなく左に下りて二人を追越す。

當士里へ平に、戻つたのは、午後一時の分、リツフを
直ぐで瑞牆山へ、道を少し行って見下したが、金華山
頂で見たところでは大して登る意欲もなかつたので

ガールにうながされるままにつり乗り込んで、ラジウム鉱泉というのに入って末をかき唯一の心残りであった。

一台前のバスに丁度向に合つたので、一瞬

金山菱出竹外に二時少し過ぎ 増富の
一風呂浴びてから帰るつもりであったが 三

の十四回目になる。丹波、谷川、奥日光
北アーニーと回想にふけりながら生き
充実感とともに上書きのような満足感とともに
な、淋しさが心に湧いて来たのは、初冬の
に一人居る静けさの所為でもあつたらう

がう今年の山々を思ひ出す。この金文字は

今年も無事であった。山日記に記録

これで今年の山旅は終りだと自分に言い聞かせる

みながら一人静かに坐つてゐる。

金山の草原は午後の中射して浴びて一面
草は目にまばゆい程に白い。時間が早いうで
に移るんで、金峰連山と青霞が掛けて

並崎駅 → 増富ラジウム鉱泉五、三五 ↓

金山六、四五、金山登七、一。→ 金山峠七、三。

↓ 富士見平八、〇。→ 大日小屋八、五。↓

大日小屋九、十五 → 金峯山頂一、〇四。一、二。

↓ 六日小屋一二、二五 → 富士見平一、〇。↓

金山一、四五。二、〇。発 → 増富三、〇五。三、一。

バス → 並崎四、四五。四、五三。新宿九、〇九着

(註)

この二ース・タイムはひなうて足り早いものであ
る。特に余り自信のない方は、才一日目は登頂
新宿を登って、最終クバスで行って金山泊し。
或は前夜登て信濃川上駅から信州峠を
越えて金山に入り一夜、翌日金峯へ登り

水晶峠より昇仙峠へ抜くうれり行程五、五

焚きする。

二の事があつてから、此の男はとんと焼酎を口に一滴
なく呑つた。余程、肝に銘じたものであらう。
或年の暮、四合詰の焼酎をぶら下げて此の男は
山に登つた。山は雪で又つた。彼は少々の酒には
音を上げないと何時も自負する男であつた。夜

男あり
此處に



山にはいろいろな人種が登つて来る。お二匹若さ
ん男、博士さん男、バスガール男、お百姓さん男
、ソーピー男、アバ男、チビ男等々。
そして本当に山の好きな男と云うものは、人か
るものだ。だから次に挙げるような連中でも、山の
神は誤認して大目に見てくれる。

来ると、山小屋のストーブの傍で、男は煙草の煙を抜いた。彼の酒の肴は甘納豆であった。煙草を飲み、甘納豆をへしゃくと食べながら、それでもよヒヨコと哀しく歩く男であった。夜が来ると、山小屋の炉端で、火に背むだけでは、彼はいつもでも尻をあぶり続けたのである。そしてそれが済むと、おもむろにザックと、手製の腰当てを取り出しそれを腰に巻きつけた。暖かそうなショーラーフから首を出して寝込んで、登山者のかたわらで、すり切れた毛布にくぐつて寝るのであった。

「此のリウマチのよう鳥に早くショーラーフサータを買わねばならぬ」と此の男も六のあした毛布にぐりなぐら心の中で呟くのであった。

山に来ると時にはいみじくもやびし、光景にふかるものである。

或る山の水場で、此の男は水中を物色しては何物も下まで運ぼうかと言う、めびし、思案を示して、いた。

仰天したが、此の男の鼻の下にこびり付く、陽は容赦なく、此の男の鼻の下にこびり付く、膚は甘納豆を照らしていた。

不^レ所作に悲^シくなるの外、刻^ミ樹^ケの玉ねぎを
片^ハテ流れ出る涙をふくめてあつた。

Y君にリヤマチの持病があるようだ。此の男も山に
来る必らず起^シす病氣を持つていた。それは、
谷川に、秋父に、南アルプスに、およそ此の男の歩く
前には心^リ下根氣よく附^ミまとつて来るのであつた。
そしてそれは、おおむね山路の途中で突然として
彼に御見舞するのである。それと知ると此の男は、
さき言^ハねつてリックを下し、おもむろに手^を取^フり
かくして草むらの中からは、ダイナミックなシンボニー
が大鼓^の連打^ううちに、はなやかにく^イ展^ゲられる
のであった。

この男も又山小屋に着^く、「冷やすのが^ハけねえん
だ」と腹薬を飲んで、南京豆^をボリ^ノと食^ひ
ながら、火^の上に足をかざして寝転ぶのであつた。

枝^を押^{せば}面^{には}ね近^づく、もうぐい込みば、足払いに
来る。一度でも偃松酒^を呑^まいた者には、精神^つ
き^トトフラ^ノに至^るありにが^ク、苦^み
は、心^で忘^れられぬものである。そしてやう苦

しみと共に、あの草に表る松脂の匂^{いも}へ覺^ゆ
ど^シかにこびりつて仲々に消^えてはいかない。
ある時、此の男は一たん顔に、あの匂^{いも}はストレー
トで飲むジンの匂^{いも}だと云つた。此の男は誰によ
ればジンという酒は頭には來^なが足^じ来て、どう
してもフラノと千鳥足になるのだそうだ。
或る年の夏、此の男もどう間違つたか、偃松の中
に迷^ハ込んだもろである。松脂の匂^{いも}を十^分に嗅
いで、ようやく偃松のラッショから抜け出した時、此の
男はあたかもジンに酔つた氣色で、フラノフラ
フラとよろけながら歩^{いて}いた。

此の男は色々な試験によく落ちたが、岩場からも
よく落ちる男であった。或る時はトラバースで、或る時
はスクップ^で、又或る時はなやかに宙をとんで
転落したが、不思議にもその度に彼の体にけがらく
いけがち見^える事はなかつた。一か月近頃は彼
樂^にには転落する事を許されなくなくなり、彼
登らうとする岩場^を壁^の高さは、転落は即^ち死と
意味するように全つて未だりである。それで彼は
岩場にとり付きながら、「どうして俺は一人を吉井

山の料理(1)

『マカロニ

吉田泰彦

「一丁盛りで、いろの、ろう」と芋を始めたものである。そして猿狩へ出ると、岩場の征服とさう愛歎よりも「やれ／＼命びろ」とした、もう二人を初詔をすまはやうよし。と、う思ひが彼の心を支えずするつてみつた。そり辭此の男は山から帰ると一人を事も忘れてスモソ／＼と道具をいそぐ中に入れ始めるのである。

此の男が美事に富ふ人で、あえなく遭難碑と化するには何時う事だらうか。或いはこんな男にも一つ倉々達下部を、魚帽子角壁を口笛を吹きながら登れるようになる日が来るものであらうか。クク

缶詰の单调な料理には開口するものだ。そんなどでこのマカロニを使って簡単に料理すること食欲も出て、翌日も調子は保証される。マカロニ料理に不可欠全ものはバターかマーガリンだ。マカロニをさつとゆでて柔かく下る。次に合せの野菜だ。これはどんなものでもいい。特にうまいと思われるものにはジヤカイモと人参、玉ねぎだ。これらを固いものからゆでてい、全体が一杯を柔かになつたら先づマカロニと一緒に混ぜ、バター又はマーガリンでいためる。出来れば、ソーセージか、ハムが入りは本を素晴らしい。これにソースをかけるともう待つ切れない。

事務所報告

（見）在庫での備品

(A) 地図 四十枚（服部七枚、吉田八枚

計十七枚寄贈）

書籍

東京附近山の旅、日本アルプス山の旅、

登山技術、谷川岳、山と渓谷

以上贈入

寄贈

奥秩父、阿蘇、籠原吾妻安達太良

山日記（五六年度版）——以上大武氏

尾瀬、山と渓谷（一へ九号）——以上吉田氏

南アルプス、山と渓谷（一へ〇、一へ一、一へ三号）

以上菅野氏

谷川岳とその附近、丹沢山塊、上高地、穂高、
槍ノスキー競本、——以上計

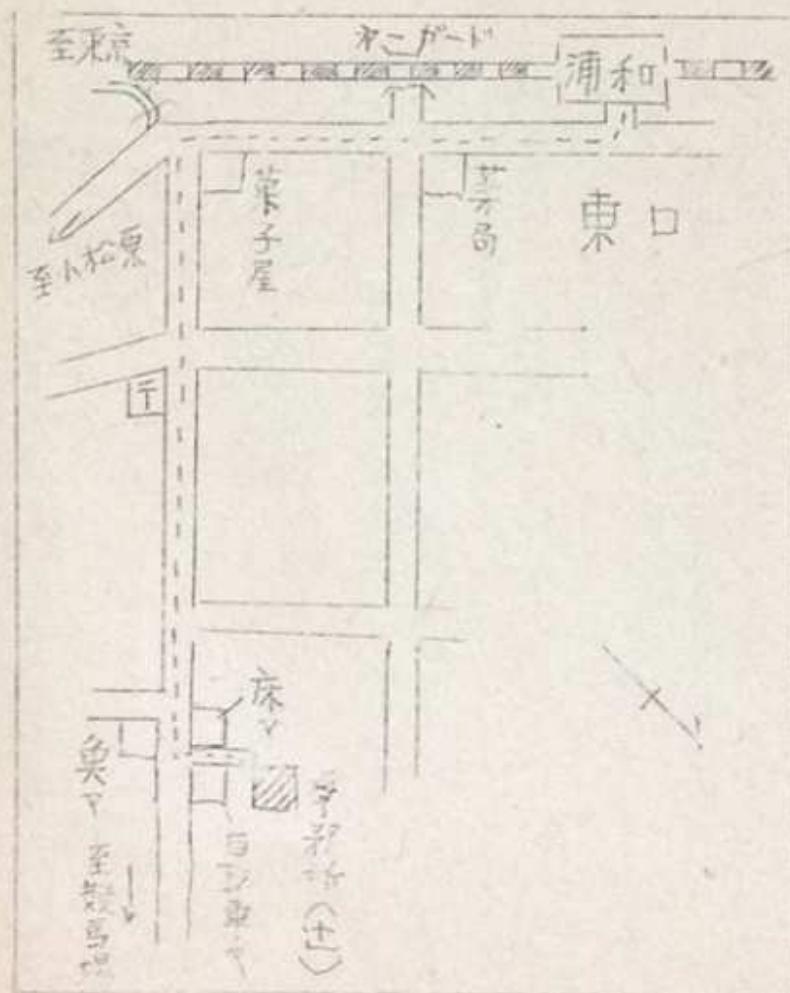
用具

天幕（五人用）、ザイル（二十米）、

カラビナ（三）、ロックハンマー（二）

備品は以上の如く全然不備ではありませんが、
おいく資金の調達を計って購入致す所存。
をも備品は事務所に常置する事になります。
から何時でも気軽に借りて下さい。
シーズン中は原則として書籍類は二週間以内に
返納、用具は一週間前後で予告してから借り
るようにして下さい。

事務所略図



駒一仙大一北岳一鳳凰縦走

十一勝四郎

これは母校山岳部の別働隊として私と吉田君が昨夏の七月三日から二十六日にかけ南アにさまつた時の記録である。

第一回

山岳部の連中と駒ヶ岳神社にて別れ、山中に入ればすぐに急な登り、重い荷と暑氣のため、我々は歩きもしく間もなく、五分歩道は五分休むところ、かくくな、調子とは成らてしまつた。特に小生の不調はなほだしく、しほしの間、道傍に寝転がつてしまつた。鬼さんは、理もなしで、五日前までは「カクランしなる生まれ」こう立ち初めでの病氣にかかり、四十度を超える熱でうなづいた身では立つたから。会う奴、会う奴、「鬼の力」ラーラも「すばりだな」とほきやがつたが。

しかし一歩間も悪用を経けて、ちくやく調子を取り直す。併し、行た頃、同行の一人が完全にバテて、遂にこれ以上登ることをあきらめて下山した。最初四人のパーティの予定は三人となり次で一人が抜けて此處で遂に常々の相棒である吉田君との相も交わぬ道行とはなりたが、それであつた。

午後をひろって小川へ帰ると、床に、眾く男が寝て五丈小屋へ。そこで一時間程茶を飲みながら時間をつぶし、腰を上げて歩いて一時間、今日の宿泊地である大小屋へと着く。時に二時半。

夕方鳳凰八ヶ岳が雲海に包まれて一入の晴。

第二回

大刀、登山七日八出松一小屋を後に

と登行開始

登るであつた南アの壁は北岳が山をサクサクとこわそかせ、その右に今ヨリナガ治地たゞ仙大

とじた山谷を見せてくる。

六方石から駒津峰を至り仙水峠に一気に下り、三川

尾根と別れて北天小屋へと向う、十時小屋の前

河原で火を起し、飯をたどり、お茶をわざわざ入れ、

十一時、やがら腰を上げて仙大へと向かって、

サクサク道は知らぬ間に一度を上げ、やがて道す小腹さ

ままで敷沃小屋を過ぎ、色彩はをやかなお花畠へと続く。

森林限界より過され、あとはのんびりとした散歩道。

駒ヶ岳、鋸岳、そして八ヶ岳を左右背後、左側を下り

偃松の中を歩き止めればやがて一時四分カルド挖りに

心大の石室へと行く。

薪をひろって小川へ帰ると、床に、眾く男が寝て

おなかで小屋の中は暖かくなり、か

ふ、い、く、は、寒、く、な、つ、だ、と、吉、田、君、ほ、や、い、た、も、う、だ。

夜に入つて小雨がパラついた。

（ここでは、カールウ、残雪が融けて流れて水場を作つてゐる。
それで雪がなくなれば水は得られなべ。）
年賀、やつとれば小屋は今年は改築される由であります。さう
人は、午時中大宮に赴いた。そこで廢ビの良ビ人だ。
（この附近には、良ビ露營地がある。）

次三

小雨も止て小屋を出る。二十分程度で山頂
立入たが雲行きあやしく、仙丈へら馬鹿、尾根を下る
一時間、森林限界に入り込む頃又々降り本一だが
かる事もなく、あとはただ单调な倒木の道上、下の
坂へ返し。やがて此の尾根の最低鞍部へと注ぎつゝ、道
の左側を野呂川へと一気に下り、鉛目(ひこめ)の道をのうちに
八時半 西股(にしあまた)木屋へと着く。

仙丈から三時間とは馬鹿ト又飛ばしたものだが、何へ幸
へするかわからぬハもので、我々が小屋に着いて間もなく、
雨は土砂降りとなつて、降り続キ、後からくすぶ濡れ
となつて、飛ひ込んで来う。登山者の衣服によつて、炉の上の
物干し場は大変を販へ左星したのであつた。
雨は終日降り続いた。

卷之三

夜未の雨やま下、登山者も暫くは待機してたが、いくらか
雨足があとろると、二、三のペーティが飛び出していく。

「東久に、晴天にて。今、いよいよ、ソウ
小屋番の言ふ如くに、六時半、雨一矢五着にて、
此の日は吉田君事意外好調で、かくて加えて彼
意を仄覺すて、又て見れば、たゞますからず、完
ペトライを次々と追越して、久しくビノキを以り、
幸今程まで太液につく頃、とうやく雨もあらず、大満
は右岸を捲く、再び沢に跨り、左とも快調にとほ
たが、釣りの仕ビッチも偃松と、う伏兵も出現した
て遂に腰を折られてしまつた。

る自己力で試みた時、我々は大喜び、
つたものであった。裏面苦戦の不、ようやく権松、
ツツシユハウ板、一時、雲が切れて青空となり、いた
ぐくりてフニクル体に鞆打つて、をとも岩屋林を出
て、トロヤクにして小太郎尾根へと出立つてある。
之處で待合せ事少一時間、広河原から登つて来た、母
於山岳部の連中と会流し、共に北岳を極めたのである
た。そして以後彼等の行動と共にし、小太郎尾根を下
りベテをみて広河原に着いたのが一時半、河原で四日川の汗

戊五日 広河原—広河原峠—鳳凰—南御室小屋
戊六日 南御室小屋—辻山—甘利山—土生峠

吾妻山
スキー・ツアーハウス
山縣昌



今ヨリの二月の中旬、東北に出張したついでに山形
林側から藏王に、又帰途福島から吾妻山にス
キー・ツアーロ試みた。吾妻山の方は、高湯ハウ五
妻山に登り五色温泉へ技ける予定であったが、
單独であり、天候に恵まれなかつたし、それにスキ
ーに未だ自信がなくて吾妻山往復で終つて丁
つたが、浅校しにスキーオ記事が欲しが言わ
れたので、そり時々記録を綴つてみることにした。

といふ山門の下で温泉に着く。これより緩く吾妻連峯は福島山群の東に聳え、那須火山系中の最も広大な火山群峰と以て構成され、南には安達太良山、西に猪苗代湖をひかえ越後守朝ノ国立公園にて居す。当日は、八時半、八時半、八時半、八時半、八時半の或る山岳会（八会とする）ハパーティへ立つて、高湯ガリ宿を出發。宿屋ではれから右へ向う道を山イン硫黄製造所の建物を左に見て、シールをきかせながら次第に高度をかさぎ、福島盆地の雲海に目を擰一めみすから一時同様て水谷湯へ出る。雪ヨの間に小こす渡水が並んで居、時々雪がちらつくが、雪々重く、八会のイーターと交番でランヤルをしてあがるが、汗が流れる程暑くなる。八会のパーティは女子も三人ばかりおり足並みおそい。十時に賽つ河原ノ湯の平の平原を行きかかる頃から正面に家形山の巨き山容が望まれる。アマニイトドマツの林を過ぎて再び出で平原へ、礎石、正面の森の裾から右に山崎腹をみてゆくと立派な家形ヒュンティに着く。今までのコースは指道標もよく終端

俳句五題

辻勝四郎

南アの山小屋のえぶには定評である。
最初うちはそのえぶさには参ったものだが、
一か一それにも慣れると、えぶくすい小屋と、
一か一から拘足らなくなつて来る。

ため平リ尾根を下つて、広河原峠に差し
べ午後の九時、森中電灯も消え、イ、
是非もなく、峠から二度、三度、マッホーと叫
はれた。是もまた事ある。そんぞ彼等の救助の
から身も凍るようす冷川が、不梢を牛ろ
せて吹き通夜けでいた。思案もなく暗門
峠に腰を下してしまつた不氣味な精神にて、
一時だった。

一か一南アと、う原始的な山への憧憬に結
べて、文書でもあらうか。或ははえらくえぶ
い山小屋に限つて人の好、番人が多い故でも
あらう。

ふと、又ひく吹き炉端を
登山者を送り出一後、午前中の山
屋は、まことに閑寂をもつてゐる。登山
の喧噪によつて活動を始める前、そんぞ
山小屋で、唯一人窓から吹き込むよ風
頬を吹拂はれながら、うたたねをする風に
も又、乙なものである。

一昨年、南ア登山の時、グルーフ一部が完全
にマッチャードで、山路の途中で野宿をし
て一また事ある。そんぞ彼等の救助の

ナンチンと湯のたきノケリ山の

ナトモツとして立止まつて一王へ事
近寄ればそれは黒ハマツチド黒ズ仄
山者一人に遇ミ至かつたが。一かし
人合つた様一さよイも鞍馬山で
天狗ノでも山喰やしたようを妙を錯覚を覺
えて思ひ乍下目をこすつて見下もつだ。

さう云えば、その時は妙に生暖ハ風が吹
たしそり男の鼻も並ヨイは下きかつた。

山深く人さえおかれタガササ

高、山々ささよつて、えー旅ノ下界ノヘと
下つてみると、今迄の冷一さが一變して急に暑
いや熱いに照、イフケられる。そして知らず知ら
下ににしみ出て来る汗を拭ハキがら、ふと「今
は夏、なんだけなし」と気が付いておや／＼と
思うのである。

里に出て始めて悟る暑さかな

比較的好天の多い期間

春山(4月下旬から6月上旬まで、

特に5月上旬までの前半期がよ)

夏山(7月下旬から9月上旬まで、

特に8月中旬までの前半期がよ)

秋山(12月上旬から3月下旬まで、

冬 ただし日本海側では風雪に
閉ざされる)

秋山(10月上旬から11月上旬まで、
行幸期)

比較的悪天の多い期は

春の雨期(4月上旬から中旬ま

梅雨期(6月中旬から7月中旬
まで、間に中休みがある)

秋霖期(9月中旬から10月上旬
まで、これも中休みがある)

秋の雨期(11月中旬から下旬
まで)



マカガシマから白毛門

静かな山あるす
(白毛門)

筒井滿榮

丁度十二号の台風が来ると言つてゐる或る日、私は友と天氣予報に心を掛けながら土合へ向つた。九月の始め、初秋ともいふべき時分、このお天氣と紅葉には少し早々季節があつて、リックを背にする人もまづらである。かく暑い日差しを受けて臨時の準急に乗車、二時五十五分上野を出ると、それで明日一日は十分の如きな事が出来る娘しさで一杯になつた。八時三十分過ぎ頃久々振りに土合駅に降り立つた。私達は相變らずのつて立つて、山々へ挨拶しながら察へ向う。

朝五時目をさすと湯檜曾川の流れが何か雨の音で林に思つてはつと耳をすます。川の流れなどと知つてはつと耳をすます。さて今日のお天氣はと気圧計を見ると、九三五ミリバール、少々危いことを思ふながら朝食をとる。

今日はの人ひとと白毛門へ行つて谷川の東面を眺めるつもいた。氣心もだ並みも知り合つた。同士の氣安いで、七時頃家を出る。ここは蛇が多くと南へたが、登り口でもう一匹ニヨロ／＼と次々と見せびで生えび悲鳴をあげる。どうも蛇とは氣が合はないらしい。

登り出してから四十分位は直登であるが、たらだら登りマイも好きなのでそのまま、休まずに登る。尾根へ出るとマチガ沢へ雪渓が見え始める。天氣はやは悪い。風も冷い。五分位休んで登り切る事にする。どうううに雪筋が深くなり私達の足元だけを残して真白におわれてしまつた。この山の中に、私達だけなんだ、自分たちのやに自然を吸い込んでしまつてい人だ。その白い霧の中で友と何も話さなかつれど、二人とも充分満足している事であった。時々去っていく霧の中から、マチガ沢や一の倉沢が見え、やがて二つの大木を岩が目の前に現われる。察の父さんが白毛門と、うちは二つの岩の間に雪が降ると、丁度門構のようになるで、白毛

「へへ」と素朴な言葉で語ってくれた岩。天気がよければ笠ヶ岳、朝日岳へも足をはいたが、このお天気ではとあらめ笠ヶ岳へ行く途中の屋根道とほづねた草木で食事にする。



霧が晴れて、武能が、若倉バハツと田の中へと人で来た。近くの芝倉屋根が目の下に早く燃えつて、青い空からはなんだか甘い香りがすこやうである。汗がんだ肌にふれる風は寒さを感じます。汗を着た。遂に待っていた、トマ、オモカ耳は、見えたが、心残りだ。腰を上げ、降りにかかる。半分かくれた谷川東西を眺めながら、お天気に追われながらじんじんする。両側は石楠花、這松、然後お、わ水、五月の石楠花の頃、又静かにこの辺を歩こう。そんな事を考えて、うちは大人の川の流れが近くを走る道を降り切ったところ、レモンの冷た水でのどを潤した。もう冷たい、に静かな山の一日を味つて、思ひだつた。

(31.9.10)

(コース・タイム)

登り——三時間、下り一時間半

(註)

11月にもましましてが美し、紅葉、シナノイチ混雑きよそに、女性だけで気軽に樂めると思ふますぐ、特に女性の方達にお勧め致します。

本年度登山計畫

これは去る三月二日の役員会（出席者七名）で決定
を蒙り、本会より本年度の山行計画です。六月迄の登
山は一応日時も確定しておりますが、多數の希望
ある時は日時は変更致します。をと七月一ヶ月
の山行計画の詳細は六月下旬に発行予定の会報
オニ号にて發表致します。

登山對象

一の倉 一の沃
一の倉 南倭(ロリク、クライ) +
白毛門 笠岳(サモウモン、ミタケ)

○六月十六(包)十七(月)、尾瀨

指掌圖

駒一早川屋根一鳳凰

○三月二十四日(日) 第一回集中登山(結成記念)

丹波水無事本谷、源次郎 波セドの波基セ

沃々四ヶ所から塔ヶ岳に集中します。
（詳細はチラシを御覧下さい。）

○四月八日、九日。

苗場山スキー・ツアーバン

指掌要員

五月三、四、五日 西丹沢合宿

指掌要員
吉田
計

○五月五日
丹沃主脉縱走

指掌要員

五月十八、十九、二十日、谷川岳合宿
(マチカネ沢旧道出合)

(註) これら登山計画に参加希望の人には、とも一
週間に事務所又は指導所にて連絡
下さい。山行三日前に相談会を開き、

宮野達也

十一月の連休を利用して谷川岳から三国峠迄の縱走をする事になった。大宮から列車に乗り込み、一睡して眼がさめるともう水上であつた。土合に着いたのは三時で、まわりは黒一色で、星だけが真上に輝いていた。雪ヨのあるの

雪が高く、展望は良かつた。

肩の小屋へらオシカ沢の頭へとすうへん氣持のよ、草地で、木道を降りて、組合へ道と分れて、太障子の小屋に着く。此の小屋はジユラルミン製で、十五人は入る事が出来よう。小屋の半分は鉄の二尺に全つた寝台である。土合を出てからここまで一晝歩いて来たので、ここで大休止する。事ドナリ、ラジオを取出してお茶をわかし二回目の朝食をと風呂をうなづ強く、小屋の窓から吹込んで部屋中をきめけていく。この休憩も十時には切り上りで終

十一月の連休を利用して谷川岳から三国峠迄の縱走をする事になった。大宮から列車に乗り、一睡して眼がさめるともう水上であった。土合に着いたのは三時で、まわりは黒一色で、星だけが真上に輝いていた。雪ヨのあるのを覚悟して、たので背のサックは皆、かみ重かつた。歩き慣れた旧道を西黒沢を横切り、西黒尾根峯山口を界して、マイガ沢出合より巖剛新道への道を行つた。湯檜曾川をへて下対岸の白毛内に誰かと登つてはるのではらう。木の間から時々櫟中電灯の光がちらりと現れていた。昼間だと一汗かくこの登りも割り合いで何と云う事もなく西黒尾根へと飛び出した。十一月だけにさすがに風はめでたく皮膚を刺されるようだった。サンゲ岩を登る頃は太陽も顔を出し、マイガ沢は赤と黄色と紫に目さめることはケイに輝いた。予想して、いた雪はなく、いさかかっケイ一空から肩の小屋をとび出した。

する。平凡な大障子の頭を越えようと、その何十回もつと万太郎山が峻えてくる。ハイ松を十六木で巻き登り終ると三六〇度の展望をもつて万太郎山頂が現われる。すぐ目の下には今日の日記の起つゝ小屋が見え、ぐんぐんと下って、又もテメテメとろにエビス大黒の頭、その向うに仙人山がある。彼方には北アハ空中に白い線が引け、間山はうつすらと煙を吐はせてくる。

乗越しの小屋はトタン張りのそまつなものだつた。

小屋着十一時二十分。入口の戸は全く窓は破れ、床などは勿論ない。色々と工夫をして窓だけはふさいだが、入口はいかんともしたがつた。

附近の枯草と無木の地面之上に敷いて床代にして、その上でシコラーフで寝る事とした。

水場までは往復約十五分、小屋の固いは熊笹と枝草だけで薪となるような目ぼ一物は何うぞ、ラジラスで簡単な食事を済せ、早々とミニラフにもぐり込む。

朝早くがさめて見ると昨夜雨が降てらしく、入口近くは水だらけだつた。风は依然として強い。

一夜で浅間山の上部は、すりと新雪をかぶつていた。一夜の睡りで下へから疲れのとれた肩にザツフを背負い、八時半 小屋を出發する。

今日も天候に恵まれ素晴らし、快適を登行だ。

エビス大黒、登りは急傾斜の石楠花とハイ松とを交えたヤセ尾根を登りだ。エビス大黒から仙倉山へすぐ目付前は見えない。仙倉山頂着十二六木の山頂に立つと、今より吉方の一帯に次

き際人でしまつた。

山頂附近は高原状をなし、くぼみには降つたら一、雪がたまつてゐる。通りの

大栗子頭、一ノ太郎山、道山、阿能川か彼方には奥白毛富士か額を出



山をめぐ中に浮遊小船の桟を留場中と三百六十度展望はあきら一帯を加

ミニから平標山とは、十

草原小屋尾根へ入る所

が出来るところとさうだ

う。平標山からは丸十

に左折して下ったところ

でいる。小屋着十時五十分

、ここまで来れば今度・行程も立合きて終つた

宿と、ホツとする。

小屋の附近は優美な草原の尾根で、所々に池塘があり
美莊しておいたくたびにふり／＼とはづむ。

一時間の休息の後、三国峠へと向う。ここまで下って
くると山も冬景色から秋の景色へと變り、紅葉も
美い。河内沢の頭の越三嶺はあたりもすこしづかく低
山帯の様相になる。三国峠からは立派な道だ、法
師温泉着三時十分、二日向の汗を温泉に流してバ
スの客となつた。

コースタイム

オード、土合榮(三、〇)——マチ田道出合(三、三五)——肩の
小屋(六八、四五七)——オヤカウ頭(七、四五)
大栗沢の頭(ヘニ)——大障子の頭(ヘニ)——
万太郎(一、五)——乘越小屋(十一、二)

オード 小屋発(八、一)——エビス大黒の頭(九、一五)——
仙倉山(一〇、〇)——本櫻山(一〇、五)——
平標小屋発(一〇、五)——十二四〇——三国峠
(三、二〇)——法師温泉(三、一〇)——バス——後園
(六、四五)

(詩) 山小屋の夜

右に肉のたっぷり入った

カレーライスのにおいを嗅ぐ
前にコンビーフと厚切り肉と

サラダを見ながら、

俺とYは、こげついた

醤油をぶつこんだだけ

あじやを、胃の中に

流し込んだ。

ぬる、茶をがぶりと飲んで

ごろりと横になつたり

すゝけたランプの光の下で、ハハハ
ぐる／＼といつまでも

回り続けていた。

夢

想

春

田

山登りする者に切り离せぬものにやゝ高尚
い言ひ下さる。

一、今、沢の岩登りに活路を見出す輩には、
シヨヘンコウ、ナウオラトリオ「森の歌」やベート
ヴォ、ピアノ協奏曲オ五番「皇帝」だ。岩角
に杭二三ヵ所示して、その時、これらの曲、庄
重的で、カリウムを思ふ、すに限る。日本一難
曲と云ふ、すること必定だ。

仙大岳、尾瀬ヶ原のお花畠を賞でう人には
トホルジマックラ六部曲オ五番「新世界」
或はベートーベンのハイオリン、ソナタ「長調「春
」」が好だ。美しく咲いている花、草、木交うヒバク

ベートーベンの交響曲第一番やスマタナの
交響詩「モルタウ」、シューベルトの「アノ五
童奏曲「鱗」となると丹波の尾根歩きや、
女性的全苗場山向うだ。さう他ベートーベ
ンの交響曲オ六番「田園」やヴィベルティの
「四季」も良い。これらの旋律を口づこみ、
暖かい日さしを浴びながら尾根を行
いと跳びはねるつだ。するともう同時に
着いたか、といふ事になる。
あくまで山に報着する人にはタシテ
ラシスク山人々の歌による交響曲」と、云々が
ある。これなどは静かさの中に激しく、直万が
ある。但し、ショパンのピアノソナタオ
「葬送」は思ふ出すべきではな。下りて
すると薙難するからだ。

一の倉・四ルニセ

辻 勝四郎

三三

小滝を越すと、やがて正面に下工が十五六

くえぐれた千ムニーとなつて、垂画に答へ

千ハニーの内部に入ると、じめく、どくし暗へ

右壁を背にして、千ムニー登りで快適に身

せる。最後は腰を浮かして右壁に取付き、壁に

落口に立つ。ここでザイルを滌の右肩にひし、

ザックを引き上げてから、Y君に声を掛けた。

F1から程なくF2が現われる。これは逆。左

を直登したが、上部が少々クブリ気味で、足立が切

れ込んでヒヤリとした。

F2の落口からすぐに大小二ヶのチヨクスーン、

はまつたチムニー滌F3が続く。

両岸がせまって、どこを登っても苦悶を強られる。

暑い日射しにたまらず、暫くチムニーの内では休息する。

さて、ルートを物色し、左壁が楽く見えて、シヨルー
で超す。ことといたが、Y君の肩に來つて
見ると、上部には確実なホールドが見当らず、餘儀
なく一旦下に降り、次いで右壁にアタックする。

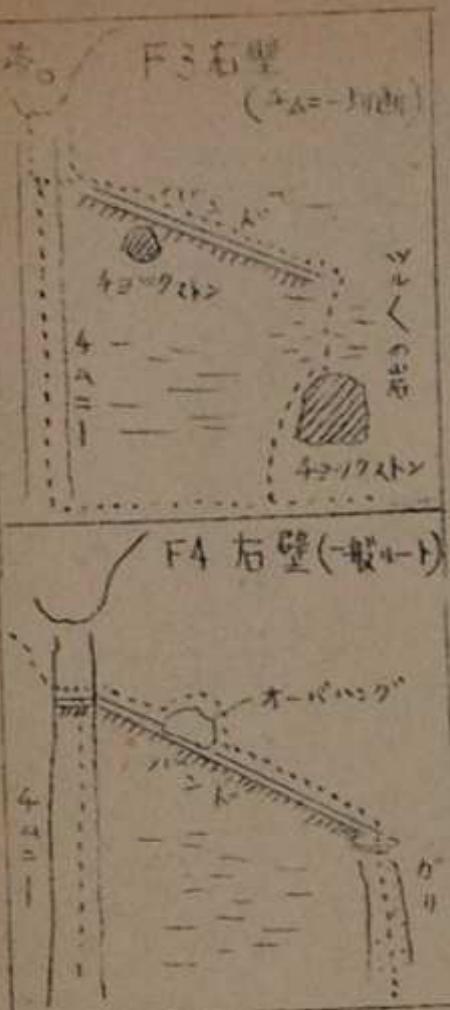
先が巨大なチヨククストンの下をくぐり、十一の内
側から強引にチヨククストン上に立つ。右壁は下り、
走り、急好む登攀日和である。

三十分の休息の後、やあら腰を上げて、よく、登
る。

和はぐくの一枝岩で手掛けなく、ここ又一岩の
肩を借りて乗り越し、トラベースして上部のチラクストン
の上に達する。此處でチムニーを横断して左壁から落
りへと並けのびる。

次いで、いよいよ四ルンセ最悪の滝下4に直面する。
ルンセは程度にはましく、右壁はほとんど垂直の壁となり、左壁は傾斜を落として、うが、スラブ状となつて、落口へと続んでくる。

正面の滝上は数本のハーケンが鎗ひ付けて打込まれて、
自此を望うと金は仲々手強わそつた。
ハートを右壁にとろ事とし、ガリ状のところを登って、
上部へ上方に細いバンドをトラベースしたが、滝の少し下前
のところにバンドの上方の壁がオーバーハングして行詰る。



何度か、此處を通過し杯と試みたが果らず、ハンクの上部
も巻けそ�であつたが、暑く負けの汗氣味の体では不
イトも出ず、ハントから左壁を物色してから一旦下へか
りる事とした。

丁度そこに打た込んでゐる捨て縄としてハント沿
いに下ったが、途中で足をすべりし、時計の振子を引
溝へと突進したが、Y君がザイルの端をあわてて押さ
れたので、危く激突を免かれ、

丁度そこに打上込んでゐる捨て縄とにしてパン治
ハに下ったが、途中で足をすべり、時計の振子を落す
落へと発進したが、Y君がザイルの端端あわてて、押され
れたので、危く激突を免かれ、
岩陰で梨を食つて一休みしてから、今度はたまにアタ
ックする。下部を肩を借りて越え、クラシ、元源の壁
をつづぱりながら、吉ハハトケンで確保してから、オ
ド、スタンスともこまかく、なか／＼に駆け下り、し
完全なジベル矣に至り下してザイルヘリ／＼を足らず
仕方なく反元の不安定さまま下部五メートル／＼
にカラビナと掛けたところまでY君に登ってもらひ、又
二、三歩登つて安全なジベル矣でY君を待つゝがし
Y君が途中でスリップし 相当なショックがザイル持つ
手をおきつたが、何とかもちこたえ、トロソロと、こ

(この下4の右壁、左壁を登って見ると、左内
書) 多くゲルートとしている。如く右壁が最も容易、右
壁は滑りやすく、バランスを保て難い。
左壁には灌木が生え、時に可能だが、壁上には草も
灌木も生えず、時に可能だが、壁上には草も
付いており、落口附近の壁は相手に悪く困難
な壁だ。以上三ルート外ルートを取ることと、壁はどこも

(エリカの心が止まらない)

下りを終ると両壁が急に開けて、眺望がよく林

に立つ。山頂が足元に切れ込み、その前方に滝天スラ

フグロく、谷門は、石トニルシテサッテルまで縫き、
シウ木ドは三ルシメハ危峻な壁をのぞかせてゐる。

たかスラツノ間に姿を現す滝天上部のマッターホルン状
岩峰が青々として、恐場を登り切つて緊張のあと
の安堵感がもたらす、あく事のない一時である。

脛を上げてなまらニ、三の小道を越すとルシビは完全に開け
てガール状となり正面に扇状のスラブが枝條の方へと続
いてゐる。その上を走る水の流れがキラキラと美しい。

このスラブハルートをとればノゾキに出られろが(数年前
このスラブ上方の草付でスリップして五〇転落して即死
したといふ遭難事故がある)我々は右手のカリドール
をとる。やがてカリは消えて草付となる、踏跡はない
とも坎々とシヤクナゲの平に誘ひ込む。そしてあえぐ向

かく我々は一の倉尾根へと飛び出した。
そして、スライドラインを描く一の倉岳へと低い熊笹の中の
踏跡に歩き里山では、左手に汗の耳が、ガスの切れ間は木
ツカリと少女を表わして、又消えた。

土合(五、〇)——の倉出合(六、〇)——本谷バンド

(八、三、一九、〇)——下4上部(十二、〇)——の倉岳(一、〇)

浦和市山岳連盟結成

吉田泰一

旧冬十一月十七日、市内玉藏院に浦和市山岳連
盟の形成準備会が開かれた。浅井からも加盟す
べく出席した。などを当日の出席は谷峰小糸会
浦和岩峯会、浦和アルペインクラブ、浦市高、
浦高二部、浦一女各山岳部であった。当連盟の規約は八章から成るが、次にその文二
章目的及び事業だけを載せる。

第二章 目的及び事業

第三条

本連盟は登山によつて心身を鍛練し、登山に
付する諸研究を行ふ併せて、会员相互の友情を
深めることとする。

第四条

市民大会、その他大会の開催
登山者福祉のための啓蒙、並みに研究相等、
公兵代用とり連絡、資料の収集、
板陶紙、及ぶその他関係出版物の発行、

遭難の予防、及び対策。

その他、本連盟の目的達成のための必要な事項

などを本連盟は浦和市内の一般、私場、学校、各山岳部
にして備成される。

現在までの会費納入者（敬称略）

十二月一日分

大武、大野、服部、久保田、小林、田中、
菅野、筒井、並塚、松井、岩崎、篠崎、
吉田、辻

一月三日分

大武、菅野、筒井、岩崎、松井、田中、

篠崎、辻

金附金

一金、千百円也

一金、一百円也

一金、三十円也

— 收入総計、三千四百三円

山縣昌彦

高橋牧郎

大武昭雄

1. 浦和市山岳連盟会費 千円
2. 書籍費

日本アルバス山々旅 三百五十円
東京附近山々旅 三百円
登山技術(安川著) 二百三十四円
谷川岳 一百五十四円
山と渓谷 一百二十円

一計 千二十一円

3. 購写原紙(三十枚) 三百円

4. 半紙(高)及び表紙紙 三百五十円

下印、マバヌノ元パッド 三百五十四円

— 支出統計、三千三十九円

御頼い、会費の納入状態がはかばかしくない

いため会の運営に支障をきたしてお

りますからなるべく早く納入して下さい。

在宅、役員会が決定しました、顧問及びオーナーの豊

田、田原、鳥本の三氏は特に会費免除となります。
ながら御了承下さい。

菜化粧品

滝沢薬局

(電) 6002

酒類 草性

山本屋

工木崎 4905

(電) 5305

各種材木

村田材木店

(電) 4413

薬は

神山薬局

工木崎 4954

(電) 1549

山のおかえりには

浦和駅西口前

市川食堂 どうで

(電) 4650

L P コンサート 毎週 土曜日 夕七時より
於ける山県 宅

会員の皆様大変御無沙汰致しました。

く感謝致します。

準備期間の少々がつたと、不備のた
の満足度出来ではありませくが、
に「溪稿」創刊号をお送り致し
ます。

当初は会員全員の記事を載
せりと計ったのですが、志一と異なむ一部会
員、記事によって埋つてしまつには残念でし
今後とも会員各位の御協力を得て
より多く会報を発行に務めようと思ひます。
引き一早は六月下旬を発行する予定で
すが、何時でもよいですから事務所迄、
お詫び、創刊号発刊に当り御協力、
山縣、吉野、吉田の諸氏に深

発行所

溪稿山岳会

印刷所

埼玉縣浦和市高砂町二八九
浦和市立高等学校

責任者

辻勝四郎

発行日

昭和三十二年三月五日

K
euryo